

第16回「親心を育む会」会議記録

「保育のパラドックス」

長田先生；2009年2月24日の毎日新聞のコラム「記者の目」で「先生：生徒指導は今」という連載の総集編として学校や子供たちの状況が語られていました。その中で、「教室で教科書を燃やす」「教室から出てタバコを吸う」「トイレで友達を殴る」等々、これは中学校での話ではなく、小学校だということです。クスリ（麻薬）が小学校に出回るのも時間の問題だということだそうです。とうとう日本もここまで来ました。2007年度に精神疾患で病気休職となった先生が4995人。毎年5000人もの先生が、心の病で倒れている。50歳代のベテランの先生が挫折して退職するケースが増えている。このようにして公教育が崩れていく。いま必要なのは、公立の小学校での教育が成り立たなくなったときの恐ろしさを想像してみることです。我が園では、年長児の保護者懇談会などで、いじめや学級崩壊のビデオを見てもらいながら、「学校に行ったら、学校の不備にクレームを出したり、先生が「当たり」とか「外れ」などと言ひ合うより、学校の先生を助けるようにしてください。そうでないととんでもないことが起こりますよ。安心して小学校へ子供を送り出せなくなるということを考えてみてください。皆さんとしては、学校の先生がその役割を果たせるように応援した方がいい。」と話していますが、いよいよアメリカ並みになってきました。

配布資料の「保育のパラドックス」（添付資料1 <http://www.kyorei.ed.jp/visiter/Essay/index.htm> からもご覧いただけます）（2003年2月3日産経新聞掲載）を見てください。保育園を中心にして、左側が経済を中心として一つの循環ができています。右側は家族や社会を中心として循環ができています。1985年のプラザ合意を切掛けにして産業界が行政に対して大合唱。さまざまな規制緩和が始まりましたが、その影響を受けて保育園は企業の下請けとして位置づけられました。エンゼルプラン、新エンゼルプランなどは、施策の中身を見てみると、子供のための施策ではなく、経済労働施策であることがわかります。これにフェミニズムが加わって、保育園がグローバルイゼーションや市場競争原理の中で企業が闘うことを支える、同時に女性の自立を支えるといった社会的仕組みに組み込まれました。その結果、延長保育、病児・病後児保育、一時預かり、年末年始保育など、さまざまなサービスの拡大を要求され、それが保育園の使命などといわれるものですから、断ることもできず、特別保育事業としてその役割を拡大してきました。

次に、右側を見てください。家庭を中心としたサイクルが描かれていますが、戦後、豊かで便利な社会を求めた私たち日本人が、いろいろな努力を重ねた結果としてはあまりにも皮肉ですが、家族がその役割を果たせなくなったという大きな変化が起きていることを表しています。食、寝など家庭の基本的な機能が失われ、最近では愛も無くなってきた。児童相談所が認知した分でも、昨年40000件もの虐待の通報が行われるようになった。アメリカ保健社会福祉省の2002年度の報告では、「児童虐待に関係した子

どもの数は450万人。内、裁判所への申立件数は319万3,000件で、虐待の事実が実証された件数は89万6,000件である。虐待による死亡事例数は1,400人で、76.1%が4歳以下である。」という報告がありますから、40000件というのは、まだまだかわいい数字ですが、いずれ日本もアメリカのようになるのでしょうか。

保育園は、一方で経済産業界からの要請を受けサービスの拡大が要請される。他方では家庭の変貌を受け、さまざまな家庭状況にある子供たちを保育する。モンスターペアレントなるものも出現してきましたし、とにかくこの15年、子供たちの変化に現場は驚いています。加えて最低基準を25%も超えて子供たちを預かるようにとの国の方針、「待機児0作戦」。保育現場では息切れが起り、いや息切れではなく「キレ」る保育士もでてきた。とにかく子供の心に寄り添うなどというような対応はできない状態が増えています。おかげで、子供たちの問題はそのまま学校に送り込まれ、小学校1年生から学級崩壊、小一プロブレム、15年立てば、ニートなどという働く意欲の無い若者で溢れるようになる。

産業界の要請で国は保育制度を変革していったのですが、その変革のせいで国や社会の基盤である家庭が崩れ、子供が崩れていく。15年20年立つと、そうした子供が育って社会に出て行く。それが更に産業界を困らせ、日本の競争力を弱める。なんとも皮肉なパラドックスですが、経済界が気付いていない矛盾をこの図表は描いています。

国は、現在「次世代育成」という概念へと保育施策を転換しつつあります。この図表が切掛けになったとも聞いています。新保育指針にもそのような傾向が強く伺われます。これはとても喜ばしい兆しとっていますが、日本の企業の社長さんが、グローバリズム・市場競争原理主義という一種の熱病にかかってしまったと認識し、早く解熱剤を飲むことが必要だと思います。それがないと、日本は変わることができません。多分、本当に困った人間が多数輩出され、会社で新人教育をしようにも手に負えない、社会が犯罪で覆われ、社会不安が広がることになってようやく認識されると思うのですが、それでは遅いでしょう。

サブプライム問題から発生した世界金融不安は、まさにアメリカ発の災いが世界を震撼させたのですが、もうそろそろアメリカを宗主国とする宗教から離脱してもよいのではないかと考えています。アメリカに従っていると、お金は吸い取られる、家族は乱れる、子供は悪くなる一方で、ロクなことはありません。

社会を良くしていくには、家庭が命です。その家庭から育っていく子供たちが健全に育てば、社会には健全な善循環がもたらされます。保育園では0歳児から子供たちを保育していますが、子供たちが良く育てば、社会は良くなります。そのような大切な仕事を私たちがしているということを認識し、社会に訴えていくことが必要でしょう。

その保育の世界に、東京都は市場競争原理を持ち込みました。保育園を競争させ、サ

ービスを上げようとなりました。すでに市場競争原理はとんでもない事態をもたらすことが結果として分かっている、行政という大きな船は、3年くらいしないと方向変更ができないのです。保育は非常に高度な技術と資質が要求される仕事です。「人が命」です。質が高い保育を求めるならば、それ相応のお給料が保育士さんに支払われる必要があります。東京都は保育士の給料について、民間の保育士の給料を公立の保育園の先生と同じように格付けし、低い国の基準との差額を埋めてくれていました。平成12年には、その制度を廃止し、競争原理に基づいた「サービス推進費」という制度に変更しました。これによって民間保育所の補助額3分の1程度になったのですから、この改革の目的が人件費の削減であったことは明らかです。当時この改革は「基本的には、民間施設を困らせる改革ではなく、むしろ民間施設の経営改革を支援する意味での改革ととらえている。決して今の予算を削ることが目的ではなく、仕組みをかえるということだ」と、当時の東京都福祉局総務部長は回答していますが、それが真っ赤な嘘であったことは、現在の状況をみれば明らかです。削られた50億円を超える予算は質の危ぶまれる東京都の認証保育所に移し替えられたと聞いていますから何をかいわんやです。その結果、認可保育所では大切な常勤保育士がどんどんパート勤務の保育士に切り替えるという現象も出てきました。これでは保育の質が担保できない。子供が社会の礎であることを認識できない人が保育施策、子育て支援施策をするからこのような結果になるのだらうと思います。

図の一番下をごらんください。心配なのが犯罪の増加でしょう。心の満たされない、不安で覆われた子供たちが育ち、さまざまな事件を起こします。その結果、治安コストの増大がもたらされます。神戸大地震の後の酒鬼薔薇事件あたりからおかしい。今、少年犯罪のサイトを検索すると、「脱人類」というのが出てきます。説明によると、「自然界では育ちようのない、不思議な心を持った青年が育って来ている。」とのこと。これらの青年の特徴は、ゲームや映像などの仮想現実の中で生きている、自分の気持ちを言葉で表現しない、コミュニケーションが取れないという共通した特徴をもっているようです。

話は別ですが、保育園では今、集団感染を予防するためにおかしな事が起こっています。苺を熱湯で消毒した後に食べさせるとか、せっかく栽培した野菜を子供たちに食べさせないとか、変でしょ！マスク・エプロン・使い捨て手袋・ヘヤーキャップのICU集中治療室装備でお餅つきをする、異様な光景とはおもいませんか？その上、ついたお餅は子供たちに食べさせないという徹底ぶり。子供が嘔吐したときには、他の子供を別の部屋に待避させ、保育士はICU装備で完全防御をしてから子供への対応をする。その間、吐いた子供は放置されたりしています。子供の気持ちはどのようなものになっているか、保育士の皆さんだったら想像できますよね。

スタンダード・プリコーション、つまり日常から危機管理意識をもって感染症予防対策を徹底するようにと、保健所は指導します。そうすると、保育室の消毒臭が強くなり、まるで病院のようになります。感染症予防の研修会などへいくと、通常のオムツ交換でも、マスク・エプロン・手袋のICU装備が推奨されたりしている。母親は絶対そのようなことはしませんよね。素手でオムツを交換し、その際たつぷりと肌と肌のスキンシッ

プを行います。ビニール手袋で肌を触られてオムツを交換される子供の気持ちはどのようなものになるでしょうね。想像つきますか？ビニールの手袋でお尻や足を触られる。違和感を感じるでしょう。それが脳に刻まれる。人との接触に違和感を持って育った赤ちゃんは「脱人類」になる可能性が高いのではないかと、そんな心配をさせていただきます。

どうしてこのような不思議な状況が起きてしまうのかといえば、それは背景に、刑事責任追及が優先されるこの国の安全文化のあり方があります。行政は保育園で集団感染が起こると、起こしたことに対する責任や対応の不備を追求することに躍起になります。保育現場は身を守ろうとしておかしい現象が蔓延していくといった悪い循環が起きているのです。保育園保健協議会の編纂した感染症予防マニュアルはとても優れたものですが、それには「子供の心への配慮」に関する記述が無い。保健所などが作成したマニュアルには、感染症予防だけに集中しています。少なくとも感染症マニュアルには「子供の心」への配慮が必要ですし、行政（東京都）も特別指導検査などをして現場を萎縮させていますが、これは早急に見直して欲しいと思います。

この図の説明の最後になりますが、右の下の部分をごらんください。「心の穴」とあります。心の闇ではありません。「心の闇が見えない」などと言うと、松居先生から、「闇はまっ暗で、見えません」と「突っこみ」が入りますから、心の闇ではありません。「心の穴」です。子供たちの心の中に大きな穴ができていないかと心配しています。お母さんと早い年齢から分離されると不安が広がり、安心感・安全感が子供の心から失われます。

子どもの発達の中で、どうやってこの穴を埋めるかが大きな課題だと私は思うのです。教育カウンセラーの内田玲子さんは、「生まれてから1000日は親が子育てに関われるように国が保障しなくてはいけない」と発言されています。その通りだと思います。0,12歳児における親子のかかわりの大切さ。母子関係は人間関係の基礎です。我々保育所は母親の代わりにはなれないのです。我々保育士が100の努力を重ねても、母親の1の努力にはかないません。ちょっと首を傾げるようなお母さんであっても。子供は世界一、自分のお母さんが大好きです。他のお母さんではありません。自分のお母さんです。虐待された子供が保護させて、一週間もするとお家へ帰りたい、母親の元に帰りたいと言うそうです。横浜家庭裁判所調停委員の池田秀子先生がおっしゃっていました。ですから、我々が子供たちに対してできることには限度があります。そうした事を認識すれば、自ずと親が親としての役割を果たせるように支援するということが我々の使命であると分かります。決して親の代替えをすることではありません。そういった意味でも「親心を育む」、「親が親としての役割を果たせるように応援していく」という子育て支援に対する基本認識が大切であると思います。

4. 「デンマークの子育て」

長田先生；さて、子育てについて、我々が目指すべき子育て支援施策を実践している

「デンマークの子育て」をビデオで見ていただこうと思います。デンマークは女性の社会進出が1965年ごろから始まり、母親が外へ仕事に出る家庭が激増していました。しかし、1980年代半ば、女性自身が「おかしいぞ」と声を出し始めました。「親は誰だ。保育士か？親か？」、「子供は親の顔を見ているか？」「親は子の顔を見ているか？」というような疑問です。背景には非行や犯罪を始めとする深刻な子供問題がありました。そこで、デンマーク社会は「家族会議」を開催し、家族や子育てに関する問題を議論し始めました。家族会議といっても、お父さんやお母さん、子供たちが集まるだけの会議ではありません。国が主催した国策レベルの会議です。その家族会議の議論の中から「家庭責任」という概念が生まれました。家族の構成員には家庭を健全に維持するための責任がある。その責任が果たせるよう、社会が支援しようとして決め、それを法律として定めていったのです。ここが日本とは根本的に違うところですよ。デンマークでは、9歳までの子供を持つ両親は、午後4時には仕事を終えなくてはならないという法律を作っちゃいました。法律でそう決めたのです。ですから、保育園には、午後5時には子供は居ません。明るいうちにみんなお家に帰ります。日本では延長保育などが進められて、夜の8時まで保育することが当たり前ようになってきました。行政も延長保育をしないと補助金を出さない。というような間違った考え方で現場をコントロールします。補助がもらえないなら仕方がないと、保育現場は心を痛めながらも、背に腹は替えられないということで、延長保育を実施する。すると供給が需要を喚起するという逆転現象が起こり、「開いてよかった」というセブンイレブン感覚で、親は仕事を延長し、子供を預けるようになります。何年前か、夜間保育所の大会に参加したのですが、宮崎県の認可保育園の園長先生が、夜間保育を厚生労働省の支援を受けて開設しようとしたら、地元から夜間保育は必要ないと反対されました。しかし夜間保育を実施したら、現実には利用者はかなり出てきた。つまり、現場はニーズがあるのにそれに応えていないのではないかと、というような意味の発言をされていました。私は逆に、その現象は供給がニーズを喚起してしまったのではないかと感じました。つまり夜間保育をやってくれるので、夜間働こうという親が増えたのではないかと同時に危惧をもちました。確かに一部には夜間保育が必要な人もいます。しかし、世の中というものは難しいもので、「やってくれるなら預けよう」という人も出てくるはず。現在土曜日の保育利用者がとても多くなっているという話を聞きますが、同じような考え方で利用者が多くなっているのではないのでしょうか。これでは、保育士には週休二日制は本当に難しくなります。労働基準法を守れない状況になるのではないのでしょうか。

こうした状況を見るにつけ、デンマークのような、子育て支援に関する基本的な考え方、「子育ての第一義的責任は家庭にある、その責任を家庭が果たせるように、行政や保育園が支援する」という理念を学ぶ必要があるのではないかと思います。それではビデオを見てみましょう。

(ビデオスタート「デンマークの子育て事情」)

(ビデオ) ; デンマークは出生率を上げようとしたのではなく、女性の労働条件や家庭事情を良くしようとした結果、出生率が上がったのです。仕事で結果さえ出せば働き方

は自由。男女の労働時間に差はありません。女性の労働が男性を長時間労働から解放したのです。

(ビデオストップ)

長田先生；本当にうらやましいですね。理念がしっかり構築されると、実行される施策は、本当に意味のあるものになる。議論されたことが施策として実践される。ある意味ではこれは当たり前のことなのですが、どうして日本ではできないのでしょうか。これは政治の問題ですね。デンマークはGNHという基準では世界一です。GNHというのはグロス・ナショナル・ハッピーネスの頭文字で国民総幸福度という意味です。GNP（グロス・ナショナル・プロダクト）国民総生産への批判から生まれた概念です。午後4時に仕事を終え、保育園に子供を迎えにいった家族には、家族そろった夕方の食卓があり、たまには、夕食をかねての森へのピクニックなども可能になっています。夜は9時にならないと暗くならない北欧ならではの特徴もありますからね。

それでいて、男性5時間、女性4時間という平均勤務時間になっています。（ビデオのグラフを指しながら）男女合計の労働時間は合計で10時間程度。うらやましいですね。その昔、人々は8時間労働を獲得するために血を流して闘った。いわゆるメーデーです。その時は男性しか外に出て働いていなかった。今では女性も一緒に働いているのだから、ちょうど半分ずつでいいですよ。4時間ずつ。ところが日本では、男も女も目一杯働かされている。子供も目一杯預けられている。南関東地区では午後11時から午前3時の間に帰宅する父親が2割もいることを知って、当時の坂口厚生労働大臣もびっくりしていました。派遣やパートで労働を調整した結果、正規雇用にしわ寄せが来ている。会社の社長さんクラスの意識が変わらないとだめですね。

日本でもようやくワークライフバランスという動きが出てきていますが、ちょっと中身がおかしい。経団連会長の御手洗さんの話を聞いていると、このワークライフバランスが雇用調整の道具に使われたりしています。ヨーロッパ型は時間がゆったりと流れています。アメリカ型はせかせかとしています。出生率が上昇し、「世界一幸せな国」と呼ばれたデンマークは、家庭を、人生大切に作る国です。もう一度根本理念から、見直すということ、国や地方行政、そして政治家が行わなくてはいけないと思います。まず、大会社の社長さんが、このことを考えるべきであると本当に思います。社長さんが変わらないと、この国は滅びるのではないかと思います。社長さんの責任は重大だと思います。

5. 共励保育園の「親心を育てる保育展」

長田先生；新保育指針の第6章「保育所における保護者に対する支援の基本」では、子供の最善の利益を考慮すること、子供の福祉を重視すること、保護者とともに、子供の成長の喜びを共有すること、などが規定されましたが、これはこれまでの労働施策一

辺倒の考え方から大きく方針を変更したものと考えられます。1995年頃から、児童福祉施設である保育所を「働く母親の為の施設」などという人が出始め、その後保育園は、「いつでも、どんな理由でも預かれ」、「それが使命だ」みたいな風潮が流布されていましたが、これを改めるものであると考えています。

品川区も、「利用者本位」という取組みを先駆的に起こってきました。当初、二重三重保育をどう支えるかが課題だったのですが、最近になって、親の変化が大きな理由だと思うのですが、サービス中心の保育に疑問を持たれ、親と協力して子供たちを育てるという考え方を模索し始めたようです。共励保育園の保育展は、保護者に対して、この1年、子供たちはどのような活動を保育園で行ってきたか、保育園全館を使って1年間の子供たちの遊びや、遊びから作り出された作品、発達の様子、カリキュラム、給食、食育の実践などを展示し、保護者に見てもらうもので、一種の事業報告のようなものです。お爺ちゃんやお婆ちゃん一族郎党そろって来場します。そこでは、子供たちが自分の作品を説明する姿や、子供たちが得意技として獲得した、折り紙や縄跳びやハモニカ演奏など、自分のできることをお母さんやお父さんの前で実演するなど、子供の自尊心や親心が育つような、さまざまな工夫が展示されています。お母さんやお父さんを描いた作品は好評ですね。お母さんから子供たちに出した手紙を展示していたりしますが、涙をさそうような内容もあり人気です。クラス便りも評判です。インターネットの掲示板のように保護者同士のやりとりが、あらかじめ了解の上展示されていますが、お悩み相談とか子供の可愛さなどが保護者同士に共有され、とても良い取り組みであると評判です。こうした、親を取り込んだというか、親と協力して子育てをするという考え方に関心を持たれたと思うのですが、品川区の部長・公立の園長2名・保育士5名ほどの先生たちが共励保育園の保育展にお出でになり、3時間半程過ごしてご覧になってきました。

保育園のパラドックス

経済を中心に考えると

子どもを中心に考えると

保育園が家庭の役割を代替えすればするほど家庭は本来持たなくてはならない力を失っていく

